

Title	コミュニケーションと想像的相互作用 : クーリー社会学における二つの視点
Sub Title	Communication and imaginative interaction : two points of view in Cooley's sociology
Author	西脇, 裕之(Nishiwaki, Hiroyuki)
Publisher	慶應義塾大学大学院社会学研究科
Publication year	1989
Jtitle	慶應義塾大学大学院社会学研究科紀要 : 社会学心理学教育学 (Studies in sociology, psychology and education). No.29 (1989.) ,p.33- 41
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN0006957X-00000029-0033

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

コミュニケーションと想像的相互作用

—クーリー社会学における二つの視点—

Communication and imaginative interaction

—Two points of view in Cooley's sociology—

西 脇 裕 之
Hiroyuki Nishiwaki

In this article, I try to show that C. H. Cooley adopts two points of view on social process in his sociological theory, communication and imaginative interaction, and I consider the relation between them. I think that this relation is a key to understand Cooley's sociological theory.

The article is divided into four sections. In §1, Cooley's psychologicistic social ontology is examined. Thereby, it is showed that Cooley adopts an imaginative interactionist point of view, especially in his comprehension of social organization. In §2, his point of view that explains the process of organization of society in terms of communication is explicated through an examination of his views on communication. In §3, it is discussed how the two points of view work in his theory of self. Here I confirm that Cooley does not develop enough his theoretical point of view about communication because of his lack of a symbol theory, and that an imaginative interactionist point of view is not adequate for an explanation of self genesis. Finally, in §4, the relation between the two points of view is considered and interpreted in terms of the import of psychophysical parallelism into the realm of the social.

構 成

1. 想像的相互作用論的視点から
2. コミュニケーション論的視点から
3. 自己論に即して
4. 二つの視点の関係

コミュニケーションが今日の社会学において重要な主題であり、また視点であることは疑いを容れない。それに比べると想像的相互作用は視点としてはもとより、社会学の術語としてもその重要性は自明ではない。本稿はクーリー (Charles Horton Cooley 1864-1929) 社会学理論のうちにコミュニケーションと想像的相互作用という二つの視点が存在することをクーリーの論述に沿って確認し、その理論体系における両視点の絡み合いを解こうとするものである。私見によれば、両者の関係こそクーリー社会学理論を理解する鍵なのである。

1. 想像的相互作用論的視点から

まず、すぐに問題になることはコミュニケーションと想像的相互作用はどこが違うのかということであろう。クーリーはコミュニケーションを次のように定義している。「コミュニケーションとは、それによって人間関係が存在し発達するメカニズムを意味する。それは心のすべてのシンボルであるとともに、それらのシンボルを空間を隔てて運搬し、時間を通して保存する手段である」(SO p. 61, 邦訳 p. 56)。クーリーはすでに 1894 年の「輸送の理論」においてコミュニケーションの分類を試みているが、そこではコミュニケーションがかなり広義に捉えられていた。

一方、「想像的相互作用 (imaginative interaction)」であるが、この語はあまり一般に用いられないばかりでなく、実はクーリー自身もその著作の中で用いてはいな

い¹⁾。類似の用語としては、J. D. ルイスと R. L. スミスがシンボリック・インタラクションニズムについて用いている「心的相互作用 (psychical interaction)」という語がある。彼らは社会唯名論者と社会实在論者とを対比して、前者のうちクーリーや W. I. トーマス、H. ブルーマーなどの立場を「心的相互作用論 (psychical interactionism)」として分類している。だが、本稿においては、彼らの用語法を踏まえつつもあえて「想像的相互作用」というあまり耳慣れない語を用いることにする。本稿においては「想像的相互作用」を以下のように定義しておく。

定義：想像を通じてなされる個人間の相互的影響。インターパーソナルな相互作用ではあるがそこで直接的に生起しているのは個人の心の中での諸観念間の相互作用であり²⁾、人と人の中で交わされるのは行為というよりは想像であって³⁾、想像を交えて他者と相互作用するものである。想像媒介の相互作用とも言える。コミュニケーションとの最大の違いは、コミュニケーションがシンボルという客観的に接近可能な実体の伝達・交換として現象するのに対して、想像的相互作用は現象としてはそうした客観的な実体を参照物としては持たない、という点である。想像的相互作用が生起している場所を強いて求めるならばそれは心の中ということになる。

そして、コミュニケーション論的視点と想像的相互作用論的視点とは、社会過程をそれぞれコミュニケーション過程あるいは想像的相互作用過程とみなした上で、その記述ないし説明のためにそれぞれ「コミュニケーション」あるいは「想像的相互作用」という概念を積極的に用いようとする視点のことである⁴⁾。

「社会的経験は物質的ではなく想像的な諸接触の事柄である」(HNSO p. 139) とするクーリーにとっては社会的な相互作用とは想像を通じた相互作用、想像的相互作用なのである。本節ではこうした意味での想像的相互作用論的視点をクーリーが採用していることを確認するために、彼が展開した心理学主義的な社会の存在論⁵⁾を検討することにする。

クーリーの社会の存在論は以下のようなものである。まず、クーリーによれば社会はそれ自体としての事物ではない。「実在的なものは人間生活 (Human Life) であって」、社会も個人もこの同一物の集合的なあるいは配分的な側面にすぎないのである (HNSO pp. 36-37)。「社会とは生活の一つの位相であり、パーソナルな交わりという視点から (from the point of view of personal intercourse) 見られた生活である」(HNSO p. 135)。こ

の「視点」こそ想像的相互作用論的視点に他ならない。クーリーはさらに続けて、この「パーソナルな交わりは一次的な諸側面 (aspects) において、また、諸集団、諸制度、諸過程のような二次的な諸側面において考察される」(HNSO p. 135) と言う。この一次的な諸側面における考察というのが『人間性と社会秩序』において展開された「心の中の社会」という社会把握である⁶⁾。すなわち、「社会はその直接的な側面においてはパーソナル・アイディア間の関係である。……社会は私の心の中に『私』、トーマス、ヘンリー、スーザン、ブリジットなどなどと名づけられたある諸観念の接触及び相互的影響として存在する。社会はあなたの心の中に同様の集団として存在し、また各人の心においてそうなのである」(HNSO p. 119)。一方、二次的な諸側面における考察に相当するのが『社会組織論』の中の集団論であり制度論であろう。だが、この一次的、二次的という区分がなされている「側面」は認識論的にはさほど大きな意味はもたないと考えてよい⁷⁾。問題なのは社会も個人も人間生活という同一物の二側面であるという一元論的な存在論の主張の含意である。

社会と個人をそれぞれ独立の実体とすると両者は直接的に接触可能であるが、一方の変化が他方の変化を導くということの説明は困難である。相互に独立であるからだ。しかし、同一物の異なる二側面という関係ならば一方の変化は即ち他方の変化であるということになり、社会と個人の連関性を確保しうる。だが、この考え方は次の問題を回避してしまっている。なぜ「社会」対「個人」という形で二つの側面が同位対立の関係であらわれて問題になるのか。つまり、クーリーが批判するように社会と個人とを分離するのは誤謬であるとしても、なぜわれわれはそうした誤った見方に陥ってしまうのかという問題が問われないままに残ってしまうのである。

さらに、社会は一つであるとしてもそれを構成している個人は多数いるわけである。それぞれ人間生活の側面であるという点では同格である社会と個人の間の、この数の上での違いはどうか説明されるのか。それとも、社会は一つであるという仮定をも拒否して社会は個人の数と同じだけあると言うのか。この問題は社会を心と見る場合にもつきまとう問題であり、しかも個人間の相互作用の捉えかたにも影響を及ぼしている。クーリーは「人間の心は社会的であり、社会は心的である。要するに、社会と心とは同一の全体の側面なのである」(HNSO p. 81) と言い、「社会的な心と個人的な心という二種類の心があるとも考えない」(SO p. 3, 邦訳 p. 6) と言うのである

が、個人の心が一応各私的なものとして配分されている以上、心のもう一方の側面である社会も各私的なものということになり、やはり社会は個人の数ほどあるということになってしまふ⁸⁾。この点についてクーリーは次のように述べて問題を曖昧にしているように思われる。「われわれは社会意識がある一つの特定の心においても、また多数の心がなす一つの協働的活動としても考察しうる」(SO p. 10, 邦訳 p. 12) と。おそらくクーリーは『人間性と社会秩序』においては前者の考察を、『社会組織論』においては後者の考察を行なったのであろう。だが、注意しなければならないことは、部分の中に全体が含まれるというこうしたモノドロジー的思考は部分相互の関係、相互作用を曖昧なものにしてしまうということである。そして、その曖昧な相互作用こそ想像的相互作用なのである。結局、クーリーの社会の存在論は社会と個人の不可分離性を強調するあまり、個人相互間の関係を不明瞭なままにしてしまっていると言えよう。

社会は個人から構成されているものの、社会組織(social organization)を成しているが故に諸個人の単なる総和ではない(HINSO p. 48)。クーリーの言う社会組織とは「最も単純な相互作用(intercourse)のうちにも存在しているが、無限の成長と適応の可能性を秘めた心的または社会的生活の分化した統一」(SO p. 4, 邦訳 p. 7) のことであり、彼はその統一性を合意としてではなく相互的影響として捉えている。この概念は現代における組織概念とは違って共通の目標達成への志向を必ずしも含んでおらず、その各部分が相互に影響し合っさえいれば全体社会から小集団まで社会の全体をカバーしうるきわめて広義な概念である⁹⁾ (新明 1965 pp. 179-181)。そして社会組織を織り成すいわば素材とも言うべきものが想像的相互作用なのである。クーリー社会学にあっては社会はまず想像的相互作用論的視点から想像的相互作用の総体として把握されたのである。

2. コミュニケーション論的視点から

クーリーの社会組織の把握は想像的相互作用論的視点からなされていた。しかし、その組織化の過程を問う際に、コミュニケーションの視点が導入される。クーリーによればコミュニケーションは社会の組織化の手段なのである(Cooley 1894 p. 40)。H. R. ワーグナーの言うように、クーリーは社会を「シンボリックコミュニケーションによって結びつけられた相互作用のネットワークであるかのよう」(Fine 1979 p. 98 より) みなしていた。コミュニケーションによって想像的相互作用の総体が組

織化されると考えていたのである。

クーリーはコミュニケーションのメカニズムを詳細に考察することが人類の内面生活の理解にとって最も有効であると考えていた(SO p. 61, 邦訳 p. 56)。それはコミュニケーションが「われわれの観念にとっての明確な枠組を提供する」ものであり、「複雑に結びついていて、人間の思考の有機的全体性(organic whole)に対応した有機的全体を構成している」(SO p. 64, p. 61, 邦訳 p. 59, p. 56) からである。つまり、コミュニケーションの総体は、有機的全体をなしている想像的相互作用の総体としての社会と対応しているのである。その対応関係は内的-外的という形での対応である。「心的成長にかかわる全てはコミュニケーションの中に外的存在をもつ。……コミュニケーションとは思考の外面的なあるいは可視的な構造であって、人々の内面的なあるいは意識的な生活の結果であるとともにその原因でもある」(SO p. 61, p. 64, 邦訳 p. 56, p. 58)。ここにはコミュニケーションと想像的相互作用という、社会過程への二つの視点が明らかに示されている。想像的相互作用として把握された社会過程が、ここではコミュニケーション論的視点から説明されることになる。

興味深いことに、クーリーは社会の組織化の手段としてのコミュニケーションを分類しその効果を分析する際に、時間-空間軸を持ち出して論じている。「輸送の理論」においてはコミュニケーションをまず物質的コミュニケーションと心的コミュニケーションとに分けた上で、それぞれを空間におけるコミュニケーションと時間におけるコミュニケーションへとさらに分類している(Cooley 1894 pp. 40-41)。またコミュニケーションの効果として、表現性、普及性ととも時間克服、空間克服を挙げている(SO p. 80, 邦訳 p. 71)。当然ながら、ここで言う時間-空間は物理的な時間-空間である。それが「克服される」というのは、シンボルの伝達によって相互に隔たった時間あるいは空間が結びつけられることで、時空間を共有しない他者との間の想像的相互作用が可能になるということの意味する。それ故、想像的相互作用とコミュニケーションの内的-外的という対応はそれぞれが関与する存在領域の区別に基づいているのである。想像的相互作用は心の内で生起し、社会組織もそこに位置づけられる。コミュニケーションは物理的時空間で生起しながら心を拡大していく。換言すれば社会はコミュニケーションのうちにその外的基盤をもつのである。

さて、クーリーはコミュニケーションの機能を大きく

分けて人間性の発達と社会の組織化という二つの点に見ている。すなわち、コミュニケーションを通じて、①個人は「人(person)」へと成型され、②人々は時間的・空間的に一つの全体へと結びつけられ(想像的相互作用が組織化され)、さらにコミュニケーションの発達は社会生活に変容をもたらすと見るのである。

①については人間性の発達の場としての第一次集団におけるコミュニケーションがクローズ・アップされる。社会組織の成立のための機能的必要条件としてクーリーは第一次集団の存在とコミュニケーションの機能とを挙げている¹⁰⁾。第一次集団の「顔と顔をつきあわせている親しい結びつき」(SO p. 23, 邦訳 p. 24)という特徴は想像的相互作用論的視点からの特性記述であると思われるが、なぜ第一次集団では共感や相互の同一視などが見られるのかという点に関してはコミュニケーション論的視点から答えざるをえないであろう。頻繁なコミュニケーションが成員間の想像的相互作用を活発化するというわけである。クーリーにコミュニケーションの質を問うる視座が明確にあったとは言い難いが、第一次集団の成員間のコミュニケーションは他の集団におけるコミュニケーションとは質的に違いがあると考えていたようである。クーリーは集団内コミュニケーションの一般的傾向として、「ある集団でのコミュニケーションが親密になればなるほど、その集団は生ける全体へとより完全かつ徹底的に結びつくのであってそれが集団の公共意識となる」(SO p. 10, 邦訳 p. 13)と考えていた。

②についてはクーリーがコミュニケーションによる時空間の克服を心あるいは意識の拡大とほとんど無媒介に直結させていることに注意する必要がある。そうした視角はクーリーに近代的なコミュニケーション・メディアの発達をもたらす結果についてきわめて楽観的な展望を抱かせることとなった。コミュニケーション・メディアの発達によって社会的接触は空間において拡大され、時間において迅速化される。クーリーの見通しによればそうした変容は、その結果として、「社会が権威、カースト、ルーティーンなどよりはむしろ知性や共感といった人間のより高度な能力に基づいてますます組織化されてゆくことを可能にする」(SO p. 81, 邦訳 p. 72)というのである。特に「大きくかつ複雑な諸社会の自由の原理に基づいた組織化の可能性はコミュニケーションの迅速性と便利に依存している」(HNSO p. 429)として、彼はコミュニケーションの発達に絶大な期待と信頼を寄せていたのである(SO p. 88, 邦訳 p. 77)。ここにはクーリーの「メディア信仰」(佐藤 1963 p. 41)が窺える。

以上のコミュニケーションに関する議論は主に 1909 年の『社会組織論』において展開されたものである。一見してわかるようにこの議論は、コミュニケーション論的視点の積極的な開陳というよりは、対象としてのコミュニケーションを論じている部分がほとんどではある。だが、ここには社会過程、特に社会の組織化の過程をコミュニケーションから説明しようとする視点が見られるのである。「メディア信仰」とも言われるコミュニケーションへの期待は、そのままクーリーの理論体系におけるコミュニケーション論的視点の重要性を示すものである。

ところで、1902年の『人間性と社会秩序』においてはコミュニケーション論的視点は明瞭ではない。むしろ想像的相互作用論的視点に比重が置かれている。しかし、そこで展開されている自己論などでは特に、コミュニケーション論的視点が欠かせないはずである。想像的相互作用の視点から自己の形成をどこまで説明できるか。換言すれば、想像的相互作用は自己の形成を説く場合の最終的説明項たりうるのか。想像的相互作用がコミュニケーションによって組織化され、そこに社会組織が成立するというのがクーリー社会学の基本的図式であった。想像的相互作用は社会組織の素材、材料であると言える。しかし、想像的相互作用そのものは無前提に所与とされてよいのであろうか。人が生後直ちに他者と想像的相互作用を交わせるようになるとは考えにくい。そこで次節においては、想像的相互作用の所与性の妥当性の問題及び想像的相互作用の説明項としての妥当性の問題を解明するためにも、コミュニケーションと想像的相互作用という二つの視点の関係をクーリーの自己論に即して検討してみる。

3. 自己論に即して

クーリーによれば社会的自己とは、「コミュニケーション的生活から引き出され、心が自分自身のものとして大切にされるある観念あるいは諸観念のシステム」(HNSO p. 179)である¹¹⁾。つまり、自己はコミュニケーションから生成してくるのである。コミュニケーションを通じて他者が抱く観念が自己の意識に反映される。そして、この反映、他者による評価の想像を通じた影響こそ想像的相互作用に他ならない。このようにクーリーの自己論のうちにはコミュニケーションと想像的相互作用という二つの視点が効いている。そこで、両視点がどのような比重で働いているのか、相互の関係はどうなのかを知るために彼の自己論を検討してみよう。

クーリーは自己の起源とその本質を自己感情に求めている¹²⁾。その所説に従うならば、子供は他者との相互作用に先立って自己感情を不明瞭ながらも備えているが、それが明確化し自己へと発達してゆくためには社会的経験を必要とする。クーリーが取り上げている経験は例えば子供が他の子供と玩具の取り合いをするというようなことである。本能的な自己感情は能力の行使や自らが事象の原因であることの観念、すなわち心と残余の世界との対立を強調する観念と結びついてゆく (IINSO p. 177)。子供は自分の身のまわりの物やまわりの人々の行為を支配しようとするが、こうした活動を通して自己感情は明確な自己観念へと発達してゆくのである。その過程で、占有行動とそれに伴う人称代名詞の使用という契機をクーリーは強調している。子供が他者による一人称単数代名詞の使用に伴う自己感情の表示に気づくようになると、その表示が子供のうちに未分節な形で存在する自己感情を喚起する。子供は他者の自己感情に共感し、それらの代名詞を自分で使用する際に自己感情を再生産するようになるのである (Cooley 1908 p. 231)。これは明らかにコミュニケーション論的視点からの説明である。ところで、このようにコミュニケーションから自己の形成を説こうとする際に特に重要なのが、他者がその身振りのうちに自己感情を表現しているということの子供が理解するという機制であることは論を待たない。しかし、この機制に関するクーリーの説明を詳しく考察してみるとそこには以下のような問題点が潜んでいることがわかる。

H. A. ファーバーマンによればクーリーの自己論において次の三点が仮定されているという。①子供は他者の行為や言語化の指示的意義を「理解」する。②子供は自分自身の自己感情を経験できる。③子供は他者の行為や言葉のうちに自分自身のものと類似した感情を結びつけ認知する。以上はクーリーの自己の発生に関する所説を簡略にまとめた形になっているのであるが、これらの仮定について次のような疑問が提示される。④シンボルを操作している様子のない子供が、いかにして他者の表現的な行為や言葉の意義に「共感」したり、それを「推測」したり「理解」できるのか。⑤そうした操作を欠いていながら、いかにして子供は自分自身の諸感情を経験しうるのか。ファーバーマンが指摘するように、「シンボルを処理できる何らかの認知的能力が行使されていない限り、子供が(他者における)占有活動と言語形式の表現的本質を認知するという仮定は怪しい」(Farberman 1985 p. 17) ものである。クーリーは人間が生まれた時

もうすでに「自己感情は常にそこにある」(HNSO p. 190) と考えたが、たとえ人間は自己感情を持って生まれてくるということをも認めたとしても感情だけでは十全な自己は形成されない。再びファーバーマンの批判を引くならば、そうした「創発的で不明瞭な諸感情は経験されない限り、取るに足らないものである。そして、それが経験されるためには、何らかの先行する認知構造が作用していなければならない。明らかに、この先行する認知構造は外的なシンボルの媒体を前提としている。このシンボルの媒体が取り入れられて、そうした構造の基盤となるのである」(Farberman 1970 pp. 265-266)。つまり、クーリーは自己感情の経験を可能にする認知構造の作用とそれを支えるシンボルの導入とを論じることなく自己感情を自己論の根底にすえることで、論点先取の誤りを犯しているのである。ファーバーマンによるこの批判はシンボル論の欠落というクーリーの弱点を見事に突いた批判であると言える¹³⁾。自己の起源論においてはクーリーは、コミュニケーション論的視点から論じつつもそのシンボル論の弱さゆえに適切な説明をしえなかったのである。

では、次に鏡映自己 (looking-glass self) 論を見てみよう。鏡映自己は周知のように、①自分の外見についての想像、②それについての他者の評価の想像、③それらに基づく自己感情、という三つの要素から構成されている。これらの構成要素がそのまま鏡映自己の構造を示しているものと考えれば、クーリーの鏡映自己論は、結局それが個人の想像の内部で形成されるという構制になっていると言わざるをえない。鏡に自分を映し見るというアナロジーに従って言えば、極端な話として鏡を持つのも、鏡を覗き込むのも、鏡の中から見返すのも、評価を下すのも、全て同一人物であって構わないということになる。

もし、このような鏡映自己論を自己の社会性を強調する議論であると言うならば、その社会性とはすでに個人のうちに内部化された社会性でしかない。これを評してファーバーマンは「反映の循環が外部の介入を欠いた閉じた回路を構成している。……この立場はメンタリスティックで、循環論的かつ独我論的である」(Farberman 1985 p. 18) と言っている。ただし、その形成に他者が関与しないのではない。そこでは想像された限りでの他者、いわば内部化された限りでの他者との間での想像的相互作用が生じている。そもそも想像を通じてなされる相互作用においては、想像されない他者など関与しようがないのである。クーリーによれば想像されることが人

の社会的実在性の条件なのであるから¹⁴⁾。人は他者によって想像される限りにおいて、リアルな存在としてその他者の想像的相互作用のパートナーたりうるのである。あるいは逆に他者の側からは、その間に想像的相互作用のある者だけが社会的な人であるとも言えよう。結局、鏡映自己とは自己の形成の説明理論ではなく、すでに社会化された人の自己のあり方を表現するメタファーにすぎない。その記述は想像的相互作用論的視点からなされていて、コミュニケーション論的視点は前面に出てきていない。

以上、クーリーの自己論を批判的に検討してみてもわかることは、クーリーは自己論においては、コミュニケーション論的視点を採りつつもシンボル論の不在のためにそれを十分展開できずに、結局のところ想像的相互作用論的視点からの説明にとどまらざるをえなかった、ということである。加えて、そうした想像的相互作用からの説明は一種の論点先取を含んでおり、少なくとも自己の起源論において想像的相互作用を最終的説明項とすることは妥当ではない、ということも判明した。ファーバーマンの批判はクーリーが想像あるいは想像的相互作用を所与としてしまっていることを批判し、それを可能にするメカニズムの説明を求めていたからである。そして、鏡映自己論も想像的相互作用を所与とするからこそ、個人の内部での反映の循環という定式化が可能になったと解釈することができ、その意味では説明理論として完結していないのである。

シンボル論の不在がクーリーのコミュニケーション論的視点の有効性を減じている。その確認の意味で、クーリーがコミュニケーションと想像的相互作用そしてシンボルの三者の関係をどのように捉えていたか、少しだけ見ておこう。クーリーの言うシンボルとは「観念の具体的表現かつまたその伝達手段」であり、「外的なもの」(SO p. 343, p. 376, 邦訳 p. 268, p. 293)である。そうしたシンボルと想像的相互作用との関係はいかなるものか。ここで、想像的相互作用とは直接的には個人の心の中での諸観念間の相互作用であったことを想起しよう。特に人々についての諸観念をクーリーはパーソナル・アイディアと称しているが、これは「何らかのシンボルもしくは他の特徴的要素に附着した一群の情操であり、そのシンボルによって、諸情操が統合されその統一体としての観念が名づけられる」(HNSO p. 120)ものである。ということは、パーソナル・アイディアがシンボルの導入を待って成立し、想像的相互作用はそうした諸観念の相互作用であることから、想像的相互作用はシンボルの

成立を待って可能になることになる¹⁵⁾。一方、コミュニケーションのシンボルに対する関係とは言えば、クーリーの理論においては、一方の他方への依存関係とか前後関係を問うことは無意味である。クーリーの言うコミュニケーションとは「心のシンボル及びその伝達」であったし、シンボルは「観念の伝達手段」であるから、両者を切り離して独立に論じることにはできない概念構成になっている。これでは分析をこれ以上進めることができない。シンボル論不在と言われる所以である。

4. 二つの視点の関係

J. D. ルイスとR. L. スミスは社会学理論にとってのメタ理論の問題として社会の存在論と認識論的・方法論的問題とを挙げ、前者が後者に対して優先すると主張している (Lewis & Smith 1980 p. 8)。それを踏まえて、彼らによるシカゴ学派の社会学者の分類も、存在論的立場として社会実在論と社会唯名論とのいずれにコミットしているかという視点からなされている。ところが、ことクーリーに関しては、彼らはその理論をすっきりとカテゴライズすることは困難・不可能であると述べて、その理由をクーリーの理論上の分裂に求めている。それで結局彼らは、クーリーのロマン派的観念論のコモロジーは社会実在論への傾向を持ちつつも、その相互作用論や自己論は唯名論的で主観主義的であると結論しているのである (Lewis & Smith 1980 pp. 162-166)。R. C. ヒンクルもまたクーリーを唯名論の側に数えているが、その相互作用的創発主義 (interactionary emergentism) や組織についての全体論的観念、社会生活の非個人的な形式への言及、目的論的で宗教的・道徳的な全体としての現実という見解へのコミットメントなどは社会実在論と適合的であるとして、クーリーを通常の意味での社会唯名論にカテゴライズするのは不適當かつ不正確であると言う。そこでヒンクルはクーリーを「社会ネオ唯名論者」と呼んでいる (Hinkle 1980 pp. 288-290)。

以上のような実在論か唯名論かという設問が社会学理論の理解のために有効であることを疑うわけではない。しかし、クーリーに関してはそこには常に何かしら不明瞭さがつきまとうことは見た通りである。あるいはクーリー社会学理論の理解という目的のためには実在論か唯名論かという設問があまり有効ではないのかもしれない。1節で見たようにクーリーの一元論的存在観は社会の存在論としては曖昧なものであり、そこにいくつかの重要な問題点を残しているからである。本稿ではそうした問題設定とは独立にクーリー社会学理論における認識

論的視点に注目して、そこでは二つの視点が採用されていることを彼の論述に沿って確認し、両者の関係を特にその自己論に即して見てみた。最後に、この二つの視点の関係について考察を加えることでまとめとしよう。

両視点の間には例えば次のような関係があるのではないかという推測が成り立つ。①時系列的発展関係、または②当事者—観察者、③存在論的一方法論的、④記述的一説明的、⑤内的—外的、という各対照関係、などなど。これらの可能性の一つ一つを検討してみよう。

まず①であるが、クーリーが自らの研究歴を振り返ってしたためた文章にあるように、彼のコミュニケーションへの関心はその経済学の博士論文である「輸送の理論」の研究のうちに胚胎したものである。そこで彼は輸送の社会的機能を社会の物理的組織化の手段として捉えていた。すでにここにはコミュニケーションから社会を説明しようとする視点の萌芽が見られると言ってよいであろう。その後、論ずる対象が物質的コミュニケーションから心的コミュニケーションへと移行するとともにその関心も深まっていったのであるが、「コミュニケーションから研究を始めて、この間にまた私は社会心理学者になりつつあった」(Cooley 1930 p. 8) とあるように、想像的相互作用論的視点とコミュニケーション論的視点とはほとんど同時並行的に形成されたと思われる。そして、二つの視点は少なくとも『人間性と社会秩序』の頃にはすでに並存していたし、また途中で一方が失われたとも考えにくい。従って、想像的相互作用とコミュニケーションという二つの視点の関係を前者から後者へのクーリーの発展的移行と解することは正しくない。また、②のように二つの視点の関係を当事者視点と観察者視点の関係と解することも適当ではない。双方とも観察者視点であり、一見、当事者視点からの記述に見える「心の中の社会」という把握も観察者視点からなされている。人の心の中で生起している現象とその人の意識内容を混同してはならない。③はすでに述べた通り、両視点ともあくまで認識論的視点として抽出されたものであるから当たらない。時として想像的相互作用論的視点の方が存在論とより密接にかかわるが、方法論的にも「共感的内省 (sympathetic introspection)」という方法で想像的相互作用の視点が効いているのである。④については一部当たっているかもしれない。確かに想像的相互作用論的視点は記述に傾いており、コミュニケーション論的視点は説明に重点を置いている。しかし、これは程度問題にすぎない。すると、⑤が正しいのか。想像的相互作用とコミュニケーションとの関係は2節で見たように

内的—外的という関係であった。これに対応して、二つの視点の関係も内的視点—外的視点という対照関係であると一応考えてよい。でも一体何の「内—外」なのか。G. H. ミードは、クーリーが精神物理学の平行論を自己流に解釈した上で社会の領域に持ち込み、同一の現実についての内的見方と外的見方をしていたと指摘している (Mead 1930 p. xxxii)。ミードによるこの指摘に基づいて考えるならば、それは心の「内—外」である。

クーリーは二つの視点に対応して二つの存在領域を想定しているように思われる。一つは心であり、想像的相互作用論的視点はその内に想像的相互作用の総体を社会組織として見出す。想像的相互作用論的視点を採用することの意義の一つは社会組織という相互依存関係、有機的全体性を強調するところにあったと思われる。それ故この視点はどちらかと言えば記述的なのである。これに対してもう一つの存在領域は言うまでもなく物理的時空間であって、コミュニケーション論的視点はそこにコミュニケーションの錯綜した流れを見出す。のみならず、コミュニケーション論的視点は、想像的相互作用がそこで生起し社会組織がそこに位置づけられる心に対して外部に立つことによって、想像的相互作用が成立し組織化されていく過程をもその視野に収めうるはずのものである。このことはコミュニケーション論的視点の説明的性格を裏づけるものであろう。

コミュニケーションと想像的相互作用という二つの視点は以上のような関係のもとにクーリー社会学理論において共存していると思われる。その共存の様態が必ずしも望ましいものではなく、理論としての論理的整合性や説明能力の点で問題を含んでいることはこれまでに見てきた通りである。しかしここでは、クーリーにおいては未展開であった二つの視点が双方とも、現代社会学のパスpekティブのうちにも認められるものである、という点に注意したい。コミュニケーション論の現状はもはやクーリーの時代とは比較し難いほどの進展を見せているが、クーリーがコミュニケーションから社会を説明するという視点を打ち出したほとんど最初期の社会学者の一人であることは忘れられるべきではない。また、クーリーの想像的相互作用論的視点が H. ブルーマー流のシンボリック・インタラクショニズム (以下、SI) に影響を与えていることは、SIの形成史においてもっと強調されてよいと思われる。想像的相互作用論的視点の方は、ほとんどそのまま現代のSI (の一派) のうちに生きていっていると言ってよいのではないか。これまでSIの形

成史においてクーリーへの言及がなされる場合は、主にその自己論が取り上げられてきた。しかも、そこではクーリーは G. H. ミードが登場する前の露払い的存在でしかないのである。だが、ブルーマーによるミード継承に疑問が投ぜられて久しい今日、クーリーのブルーマーへの影響関係がもう一度問われるべきであろう。こうした学説史的関心からもクーリー社会学の再読・再評価が今日もっとなされてよいはずである。そうしたことから、クーリー社会学における視点を抽出し、確認することには大きな意義があると考えられる。個々の論点を見るだけでは影響関係は測り難いからである。本稿が、これまでの S I 形成史のようにクーリー社会学理論における個々の論点を取り上げるのではなく、認識論的視点といういわば理論全体に関わる問題に焦点を合わせたことのねらいもそこにあるのである。

注

引用文献については、引用後の括弧内に著者名・刊行年次・頁数の順で記し、邦訳のあるものはその後に訳書の数頁を付記した。ただし訳語・訳文は必ずしも邦訳通りではない。なお、クーリーの以下の文献に限り著者名・刊行年次の代わりに略号をもって示した。

SO: Social Organization

SP: Social Process

STSR: Sociological Theory and Social Research

HNSO: Human Nature and the Social Order

- 1) クーリーは 'interaction' という語さえそう多用しているわけではない。クーリーは人と人の相互作用に言及する場合は『人間性と社会秩序』や『社会組織論』においては 'interaction' という語よりも 'intercourse' の方を多く用いている。『社会過程』においては 'interaction' も多用しているが、その場合は人をパーソナル・システムないしは生活のパーソナルな一形式として捉えた上で、システム間あるいは生活形式間の相互作用を論じる際に用いている (SP pp. 3-4, p. 27 など)。
- 2) この点についてクーリーは例えば次のように述べている。「直接的な社会関係の研究においては、パーソナル・アイディアこそが現実の人である。端的に言って、ある人間にとって他の人間が存在し、その心に直接的に作用するのはただパーソナル・アイディアにおいてなのである。私のあなたとの結びつきは、私のあなたについての観念と私の心の残りの部分との間の関係のうち存する」(HNSO pp. 118-119)。
- 3) 想像を通じた相互作用であって、想像された相互作用ではないことに注意。さらに、この概念については「相互行為」ではなく「相互作用」という語がふさわしいことをつけ加えておく。クーリーにおいて

は行為論的オリエンテーションは R. C. ヒンクル (Hinkle 1963) が言うほど明瞭ではない。社会は行為システムというよりも観念システムとして把握されており、存在論的には社会の直接的現実とは行為ではなくパーソナル・アイディアである。

- 4) 前述のようにクーリーは「想像的相互作用」という語を用いていないので、ここでは類似の用語での記述や説明をもって想像的相互作用論的視点を採っているものと解釈しておく。
- 5) 社会的事象を個人心理への還元によって説明する心理学的還元主義——例えば、G. C. ホーマンズのそれ——などの方法論次元の心理学主義とは独立であることに注意。R. C. ヒンクルによればクーリーは方法論的には全体論あるいは文脈主義にコミットしていたという (Hinkle 1980 p. 221)。
- 6) この社会把握は、M. J. コーヘンが言うような心の存在が論理的に社会過程に先行する (Cohen 1982 p. 151), ということは意味しない。両者の関係は前後関係ではなく並行関係であり同時進行するのである。そして、個人的な心に関してはクーリーは次のような主張さえしている。「個人の心の成長は分離した成長ではなく、むしろ一般的な心の中の分化である」(SO p. 71, 邦訳 p. 64)。
- 7) 本稿で取り扱うのは「視点」であって、ここで言われるような対象としての「側面」ではない。換言すれば、本稿の主題は対象としてのコミュニケーションや想像的相互作用ではなく、コミュニケーション論的視点であり想像的相互作用論的視点であるということである。注意しなければならないことは、クーリー自身が「視点 (point of view)」という語をそう厳密な意味においては使用していないことである。例えば、クーリーは『社会過程』の中で三つの視点から人間生活を見ることができると主張している (SP pp. 27-28) が、その「視点」の指示するところはここで言う「側面」に近いのである。
- 8) 社会は個人の数と同じだけあるという考え方はそれだけ取り出せばそれほどおかしいことではない。「一つの社会があるのではなく、多数の社会が諸個人のなかに散逸している」(今田 1987 p. 209) という表現もできよう。だが、こう考えることは、少なくともクーリーの理論体系においては社会よりも個人を優先させることになりはしないか。
- 9) ただしクーリー自身この概念に満足していたわけではないようで、後には用語として「組織 (organization)」よりも「有機体 (organism)」の方が適切であるとさえ主張している (SP p. 26)。
- 10) 尚、第一次集団論を社会の起源論として解するのは誤解であろう。クーリーは社会の起源論に関しては「起源などない。われわれは諸起源については何も知らない」(SP p. 46) と述べている。しかし、また、「クーリーに従えば、初めに集団状況があったのでなければならぬ」(Meltzer et al. 1975 p. 8) というのも確かであろう。要は第一次集団論を発生論的ではなく機能論的に解するべきであるという

- ことである。そう解釈すれば、クーリーは第一次集団のうちにあらゆる制度の発生を位置づけることで自身の有機観に違反している (Fuhrman 1980 p. 192) という批判は当たらないことになる。
- 11) クーリーは自己と自己観念の区別をしていない。そのために、クーリーの言う自己とは心の中のパーソナル・アイディアにすぎず、経験の客観的な位相に属さないものになってしまっている。これは G. H. Mead がクーリーに向けた批判の一つである (Mead 1930 pp. xxxiv-xxxv)。
- 12) クーリーは「私 (I)」という語の意味分析を行ない、「『私』は第一に自己感情あるいはその表現を意味する。……『私』はまず感情として、あるいはわれわれの諸観念における感情成分としてわれわれの経験に知られる」(HNSO p. 172) と述べている。
- 13) 自己論とシンボルの問題との関連については、ファーバーマンとは若干ニュアンスの違いはあるものの J. D. ルイスと R. L. スミスも触れている。彼らは人間が自己感情を備えて生まれてくるという仮定よりも、自己を自己感情へと還元してしまったことの方が重大な誤りであるとした上で、その還元とクーリーが思考とシンボルのコミュニケーションについての適切な説明を提示しえなかったこととを関連づけている (Lewis & Smith 1980 p. 165)。
- 14) 『人間性と社会秩序』の中でクーリーは、繰り返し、人の社会的実在性はその身体的現前とは関わりなく、想像されるか否かに依存すると述べている (HNSO pp. 95-96, p. 120, pp. 122-123 など)。
- 15) 想像的相互作用が想像を媒介とした相互的影響である以上、すでにファーバーマンによる自己論批判から、想像的相互作用のシンボルへの依存関係は明らかであるが、ここでは実際に生起している相互作用の項としてのパーソナル・アイディアの成立の面からその依存関係を確認してみた。
- Press. = 大橋幸・菊池美代志訳『社会組織論』青木書店 1970.
- . 1966 (1918) *Social Process*, Southern Illinois University Press.
- . 1969 (1930) *Sociological Theory and Social Research*, Augustus M. Kelley.
- . 1983 (1902) *Human Nature and the Social Order*, Transaction Books.
- Farberman, H. A. 1970 "Mannheim, Cooley, and Mead: toward a social theory of mentality", in G. W. Remmling (ed.) *Toward the Sociology of Knowledge*, Routledge & Kegan Paul, 1973, pp. 261-272.
- . 1985 "The Foundations of Symbolic Interaction: James, Cooley, and Mead", in N. K. Denzin (ed.) *Studies in Symbolic Interaction*, Supplement 1, pp. 13-27.
- Fine, W. F. 1979 *Progressive Evolutionism and American Sociology 1890-1920*, Research Press.
- Fuhrman, E. R. 1980 *The Sociology of Knowledge in America 1883-1915*, University Press of Virginia.
- Hinkle, R. C. 1963 "Antecedent of the Action Orientation in American Sociology Before 1935", *American Sociological Review*, vol. 28, pp. 705-715.
- . 1980 *Founding Theory of American Sociology 1881-1915*, Routledge & Kegan Paul.
- 今田高俊 1987 『モダンの脱構築』中央公論社.
- 小島 勝 1979 「C. H. クーリーと第一次集団」, 『ソシオロジ』74号 pp. 19-36.
- Lewis, J. D. and R. L. Smith. 1980 *American Sociology and Pragmatism*, University of Chicago Press.
- Mead, G. H. 1930 "Cooley's Contribution to American Social Thought", in HNSO, pp. xxi-xxxviii.
- Meltzer, B. N. et al. 1975 *Symbolic Interactionism: Genesis, varieties and criticism*, Routledge & Kegan Paul.
- 佐藤 毅 1963 「コミュニケーション社会学の問題—コミュニケーション論史を中心として—」, 山田宗睦編『現代社会学講座IV コミュニケーションの社会学』有斐閣 所収.
- 新明正道 1965 「クーリーの社会組織の概念について」, 『現代社会学の視角』恒星社厚生閣 1979 所収.

参考文献

- Cohen, M. J. 1982 *Charles Horton Cooley and the Social Self in American Thought*, Garland.
- Cooley, C. H. 1894 "The Theory of Transportation", in STSR, pp. 17-118.
- . 1908 "A Study of the Early Use of Self-Words by a Child", in STSR, pp. 229-247.
- . 1930 "The Development of Sociology at Michigan", in STSR, pp. 3-14.
- . 1956 (1909) *Social Organization, The Free*